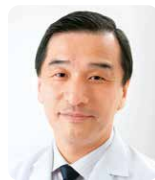


10年先を見据える ことが治療の第一歩

担当医



久保 明先生

医学博士 糖尿病内分泌専門医
医療法人財団百葉の会 銀座医
院 院長補佐・抗加齢センター長

コロナ禍の影響で糖尿病を発症したFさんのケース

患者氏名	F・D様	年齢	35歳	性別	男性	現病歴	糖尿病
------	------	----	-----	----	----	-----	-----

新型コロナウイルス感染症の拡大は、世界中の人々にさまざまな健康被害をもたらしました。私の患者であるFさんもその一人です。一昨年4月にFさんが受診されたときの血糖値は118 mg/dL、ヘモグロビンA1cは6.2%と、やや高めでした。このままていくと、糖尿病に発展する可能性のある数値です。

本来ならば定期的な検診が必要でしたが、コロナ禍で対応が遅れ、やっとな秋に検査できたときには血糖値が200 mg/dL、ヘモグロビンA1cが8.0%まで上がり、急激に悪化していました。今回の新型コロナウイルスの感染拡大によって、糖尿病が悪化したという人は少なくありません。Fさんの場合は、多忙によるストレスと運動不足が原因でした。

Fさんは洋菓子職人なのですが、コロナ禍の巣ごもり需要で洋菓子が売れに売れ、多忙を極めてしまったのです。甘い洋菓子の試食回数も増えたことでしょう。ただ、まだ30代半ばでこれといった自覚症状がないFさんは、糖尿病と宣告されてもあまりピンとはきていない様子でした。

私は講演などでしばしば「糖尿病は想像力の疾患」ということを申しあげています。糖尿病と診断されても、実際に深刻な症状が出るのは5年後、10年後です。その将来を想像できないければ、本当に治したいという気持ちになりにくいからです。

Fさんにも「10年先を見据えて、今からしっかりコントロールしていきましよう」とお伝えしました。次回の受診が今から楽しみです。